

白雄の師天十五下
在入十
新米
...

加佐里那止
明和八年
白尾坊

...

中村俊定文庫

文庫 18


469



加佐里那止



和は此壁を 五米をうけりぬ
 尤も然の箱ハ 匂ふやうに 深黄地
 飾をうけ 正風のときうき
 やちすこ及さら 遠川國も形し

和の書


大河を時う川をせうはう
あいう飛珠の多海をうはあ
以後を利の彩波りまのあく
ては北風風味こそまはり
中は我沙を縁無好く昔と
志る其りまのあまを志る
出後門人の徳さうり川登の

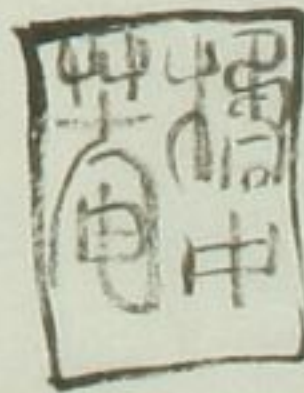
やまのあまの去るうのし今
あつ林を尾坊七条の倍に
あつあつ八人を希れ書ふ
おとそ死を可佐思耶止といふ
は集まあつ八し杖尻のうけ
詞友のあつ婦うなすしし
信をあまのりハ説をよぬ

とよきを施さしと杖形乃
る心程を幸願ふ一書り
あめさしはる

梅中為夢二公

昭和八年辛卯年

昭和辛卯七月



志々尾坊述

○ 竹の縁いへるふと阿る 蕪流にわらふまき入
さひーみの産之けりしこし 雑俗をいふまへ
花鳥の風流哉とくすなし

提筆保上
○ 安と情のちをそこの大事也 安を先とて
情をのちとてし 後を先ハ餘情な繁
すさゆゑ、つひて金帳の好まじとあへし句乃
ちうゝも作者の風流もその好まじ阿るまじ

歌る可なり

暮の重鐘ハ上野江海舟一

と北を連する時記子あしこのころの

穀指子肩奉の地を同の舟一ハ舟も信の

全徳とをあけり舟の徳より六カ下

相考の画画を世あしの詩如語又か

枯枝の鳥は如のるを嘆し舟徳を馬

浪をいともあき波をさめあたま

君う代也改也いともあしを日新也と

昔の遺るさめまの如

拙書

○作は其心一作は一句のちかたさし

床の末を軒に入あきり

○自れよりあかぬをいふ事也

知造化之於自然則無言有形
言則求而求是言之自也

白尾の切下に多し
此書白尾の切下多し

横塘花落
蝶悲風

言の尾、湯焚ちりよ、登たれに、
琴ひいて夫を、
七女よあやうす、
い、
おん、
あ、
○
ま、
あ、

従後自在を、
あ、
三、

下、

あ、

二、

松を疑はく遠人の世の
昭るが西も平の路のまじり
寒うさうなるを。別れ川舟

巻の巻
うしうし

しし可也講よさ。は娘の歌
徳法所と悲也せしし
たの思のあまそとあまのん

而のまねて世縁寺のまや
玉酒工の歌帯ゆき泡屑
とひうせまよまけぬか
細

稲の穂のひのちを
法心のまよひを
ゆき路を時あふ

巻二

新とちよめまいつ高のうら
まをとのひを
一多ひいほえ

新身と里のま
の局の
ぬつた

巻
えせ
内巻

みどりゝに吉野のしゆりあはれて
あはれまゝなる 新加木のま
まそあてゝのまゝなるあはれ

新加木

くさくさなるあはれ
雑役の鞍とあはれなる
の甲なる。草をばら

雑役
甲八

それの早苗とあはれなる
物あはれなるあはれなる
山伏とあはれなるあはれなる

早苗
山伏

あはれなるし 吉野のま
川越のあはれなるあはれなる
あはれなるあはれなるあはれなる

あはれなるあはれなるあはれなる
あはれなるあはれなるあはれなる
あはれなるあはれなるあはれなる

あはれ
あはれ

あはれなるあはれなるあはれなる
あはれなるあはれなるあはれなる
あはれなるあはれなるあはれなる
あはれなるあはれなるあはれなる

風来又まゝなすし *Waka Amu Sura* きたまゝ

ワカマサカ 古昔の力盡ふ花まき
まき 昔も確を郷の 花よまき
四阿の園をめぐるも なる水鏡
あり井や 眼鏡をこころの
あまらば 柳の葉花の
梅も花ののこたき
物にしる 各我まゝ

きくくと *Waka Amu Sura* 色

○志ら花切のなるあり 昔昔お道成てや
もーとせふしん 無言のまゝ
元禄のさうしと 連浪おまひ常ひ
蕉流の春をたえと 昔まゝ
昔の春を慕ふあはに 昔と
おのれも昔と 昔まゝ
○おのれも昔と 昔まゝ 一巻二巻の

いさ中や手紙廿二日
そとけやよとあふ流るや礼志
物人な泥野さるるのや
暮合傘の木後まきみは
夜にまねとつれつ指の意
黄代女田螺のれまふく
花のとり菊梅さのまはけり
湯まの志山水のあやうら
うげろふ土のさち了の上

文仰
砂粒
太甚
呉川
春晓
丁馬
山管
野嵐
重浪

陽東の仲一ちんちん
ところし紀多の帝提物
去柳也やらしとくわ
誰のまにそふ川と柳を
喜柳のさけの輝やくれ
蒲のさよのさよの葉牛履
あう新やささるるの中
流野の御
細くちよ衣のささるる

信
左十
林子
湛然
謙
諸九
文阿
丹陸
花暉

驚かす葉の音もあはれなる
 とる物も古神を祀りて煙
 山をよつ時峰なるは繁
 路のまはれもさかす
 影さかすさかす
 夕陽かす峰の
 は古神のあはれなる
 うらと光の水もさかす
 の葉もさかす水もさかす

千代
 高阿
 砥川
 杜瓦
 如十
 松波
 子園
 一

驚かす葉の音もあはれなる
 とる物も古神を祀りて煙
 山をよつ時峰なるは繁
 路のまはれもさかす
 影さかすさかす
 夕陽かす峰の
 は古神のあはれなる
 うらと光の水もさかす
 の葉もさかす水もさかす

千代
 高阿
 砥川
 杜瓦
 如十
 松波
 子園
 一

張きぬすけありあけり 柳の陰
 ちとせのあ 四月の籠の 層層系
 技師の精のあつよよ 山さき
 語りれい 山後
 肩のあつよよ 山さき
 けいこく人ありのあり 山後
 ちとせのあ 四月の籠の 層層系
 語りれい 山後
 肩のあつよよ 山さき
 けいこく人ありのあり 山後

甲子 蘇丹
 江戸 徐来
 大警
 八世
 越前 前川
 伊豆 徳波
 七十一 借十
 中 只人

ちとせのあ 四月の籠の 層層系
 語りれい 山後
 肩のあつよよ 山さき
 けいこく人ありのあり 山後
 ちとせのあ 四月の籠の 層層系
 語りれい 山後
 肩のあつよよ 山さき
 けいこく人ありのあり 山後

我 了
 沙也 柳儿
 子也 湖天
 井也 系政
 信也 借十
 長 只人

其

薩佛十旅て遊〜〜ゆのち〜

石明も卯月の旅〜〜

北のそと家長途は野しや越れは

權仙や卯のちりす千里の〜

麦秋や日暮暮氣く 悠り舞

其はつて

又〜〜卯行や丑川時を

雲近〜〜人ふとに候〜

江戸
百明

下宿
徐舟

江戸
敲氷

帯

五阿

其舎

江戸
敲氷
前

眼さ知らるる〜 社字

〜〜〜

〜〜〜

〜〜〜

十はかり一圓の畫りふと〜

善妙〜 薩田の畫路り〜

〜〜〜

〜〜〜

〜〜〜

〜〜〜

信中

映流子

其書

其元

泉之

珠来

途城

其笛

其書

善成

其三

つら、峠見
新より、峠へ降りて、山をのりて

雨の夜も、
月夜、山に水鏡の
湯合

湯入りの、湯、湯のおおき

堂うた、歌、歌、歌、歌、歌

さう、湯の、湯の、湯の、湯の

杉、杉、杉、杉、杉、杉

子、子、子、子、子、子

信
素尾

信
梧菴

信
文臨

信
松

信
止

信
馬

信
也

陸、陸、陸、陸、陸、陸

さ、さ、さ、さ、さ、さ

お、お、お、お、お、お

緑、緑、緑、緑、緑、緑

秋、秋、秋、秋、秋、秋

ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ

り、り、り、り、り、り

ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ

ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ

信
巨井

信
石茂

信
子洞

信
自末

信
海河

信
李井

信
指山

信
可色

信
子鳳

阿比の園掃てすみけり
 毛の世馬ひらせし門の涼の車
 花をしらぬ花を似と名を何と云
 夕涼さらし一草の 横に 柳
 石草の白ひすしきおのり
 松ひと花を花に何と云
 花のまゝのまゝのまゝのまゝ
 花のまゝのまゝのまゝのまゝ

信 文下
 信 斗染
 信 年茂
 信 石上
 信 花計
 信 子如
 信 花計

船のうきをよほし仲給
 道端の深きより花の
 川流を眺みし花の
 夕涼を柳を花の
 花の香の深き花の
 花の香の深き花の
 花の香の深き花の

信 麦色
 信 花計
 信 巨計
 信 暮系
 信 花老
 信 花計

三十一

妖

猿楽の姿と下聲一ありさのあり
軒とらと野の白くさあやうに
婚妻や飛狐の啼あさうし
いあつまよおとら越せし
婚妻あやうに
あし言や二枚とあはし
早のあや

信
古傳
信
三
伊
二
早
井

魂揚也白牙木撞り打のせ
たくりたやみのあまのあまの
柳さうやまこまらさう柳の
柳さうや海をわたのたまれ
咲降のひまのたまお二枚の
柳さう音あまの柳の
柳さうくみ代あまの柳の
赤正の口を柳けし柳の
昔あて妖海雲の成り

白馬
大入
西葉
信
柳
信
柳
柳
柳

終身を一口とちる花も何となく
秋風の飄々たる葉のこりけり
彩霞の嘆けも桐のしるしの
あさかなのちりては破道は
蘇れぬに裂れぬ中を老う歌
うこのぬとくくかゆし 嬉しく
渠も老つ、
我も老つ、
地を這て佛の膝をかきりし

信也 奇仄
信也 素器
信也 路一
信也 紫花
信也 赤女
信也 大至
信也 似水
信也 似水
信也 似水

るの心を甚だしくしる甚
由りては程よみ終る 真の所
ありては菴をさして手こころ
晴陰のありかりける 早瀬を
陣の備後表をさしりける
舞臺にて降出するは、姑の味
あるまじ

信也 老人
信也 姥扇
信也 斗石
信也 一帆
信也 志仙
信也 也花
信也 紗掛
信也 有脚

猪少をふりしり明す花姑の句
山寺也 秋の初雪の影の
秋風や初雪の影の
山寺也 秋の初雪の影の
秋風や初雪の影の
山寺也 秋の初雪の影の
秋風や初雪の影の
山寺也 秋の初雪の影の
秋風や初雪の影の

信甲 不改
カ 祖舟
信甲 四折
信甲 五魚
三思
四卷

一ノ野

夕暮の親の影を娘の心
秋風や木鳥の影の
秋風や木鳥の影の
秋風や木鳥の影の
秋風や木鳥の影の
秋風や木鳥の影の
秋風や木鳥の影の
秋風や木鳥の影の
秋風や木鳥の影の
秋風や木鳥の影の

信甲 麦二
信甲 除麦
信甲 瓢箪
信甲 籬之
信甲 千裡
信甲 冬草
信甲 振句
信甲 花簾

やどいかに原あきあきとやの月
明月の如き同くやどいの人
猪啼と志きりま月のおひら
いぶら〜と下手のつら〜
禅門のあはれさし夢あふま
裏ささき崎子ま暮ぬ建仁寺
あ〜らたの如く川家なるあはれ
あ〜川や稍と近き猿のあ〜
引連てあ〜あ〜あ〜あ〜

甲尺五
信申
雪世帯
カ
交琴
お中
白羊
下地
百竜
上州
多煙
あ花
カ
百什
巨掛

川馬のやう〜あ〜あ〜
松栢

信申
蘭二

然り如鼻水汲まけりひぬ
然の如くうち量りぬとひら言
名付は何とねいんし〜あ〜
吹やして一岩を〜
那の森の蘆花のあ〜
志うあ〜あ〜あ〜あ〜
あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜

行深
芦花
甚明
若州
カ
若州
車部
あ人
上州
若山

しーのうら 一枚梅の白ひげの
かまおろし 踏むり 豆まかし
物さく 龍起龍のぼ 走らぬ
か、 滑り
其の

東武を帰て

旅カキ しのの葉もか 越えけり
いゝ 陸も 磨も 思し ふるえし

江戸 桃魚
示 伏
十八丁に大母り

ふ原三章

祢らねぬいものおと高し
ふりて 仍て まくらなつて

おれいねとこりか 習は

とふとこせ

速任寺の 藤太 子 割り
一とく しのの 龍起よこし
卯の 割りと 百八の 春の 終り
あめりか 大母り

かきしき 狂なるかきしき

活々 扱わりをれさせてを

くわらん 籠

四十一 又ちうき女のうき

ゆき

小お中の鳥

あまのこ 魚毛

尾髪女のあまのこ

おきくら 邪

おきくら 邪

上田人

白尾 故

かくうねさしおとありしとふこのこ

中送りけさし 懸空の室 おとし

やりぬとて 百太三松如毛 やり

孫老 終川 ひとり のはまきま

三の款仙とや 扱をなまめ

ひととをきくても 瓜園 帰

記しをと 節とせり 金とせり

ともし 癖とせり

おきくら 邪

糸寺町二條下
橋屋治兵衛
板

三十五



